

データベース構築考（デジタルファイリングへの誘い）

シンクフジイ 西尾 潔

はじめに

一言にデータベースといつても、世の中には多種多様のデータベースが存在しています。それも多種多様な使われ方をされています。しかし、どんなデータベースでも一番重要なことは、「まずデータありき」との一言でしょう。

データの無いデータベースは、そのデータベースエンジンがどんなに速い検索ができるようが、どんなに大量のデータを扱えようが、どんなに使いやすいユーザインターフェースを持っていようが、使いものにはなりません。性能の良いデータベースとはデータの豊富なデータベースといつても過言ではないでしょう。

最近データベース構築を提案する機会がありました。そのときの提案の一部を紹介します。以下は、当社が取り扱っているファイリングシステムの提案に用いているコピーです。尚、ファイリングシステムはデータベースの一つの応用例です。

ファイリングシステムでの情報デジタル化のご提案

なぜファイリングが必要なの？

情報が氾濫する昨今、「情報資産をファイルに保存しておきたい」、「必要なとき必要な情報を自由に検索したい」、「情報を加工して再利用したい」、「プリントして報告書、パンフレットに使いたい」などのニーズが発生します。

このためには、写真、文書、図面、数値データといった情報を、規模を問わず一元的に統合管理する必要があります。

ファイリングから情報価値を創造する！！

ファイリングすることは単に情報の整理をする作業ではなく、未整理情報を運用しながら体系的に分類整理し、新しい情報付加価値を創造する作業であるともいえるでしょう。

しかし、膨大な量の情報を整理するのに人手では追いつきません。

そこで電子ファイリングシステムが必要となります。

情報はデジタル化されその価値が増す！！

さて、情報を電子化することは情報をデジタル化することです。

アナログ情報は、デジタル化して整理しファイリングすることで、誰でも簡単に手に入れることができ可能な情報へと変身します。

また、情報をデジタル化することで、それまで利用できなかったアナログ情報に付加価値が付きます。価値あるアナログ素材をデジタル化してビジュアルとして

残すことは、文化の未来への継承ともいえます。

電子ファイリングは単なるデータ整理ソフトではなく情報化事業の決め手

情報化を進めるということは、高度な設備を導入することではなく、まず手元のアナログ情報をデジタル情報に変身させることから始まります。

つまり電子ファイリングシステムは、整理された価値ある情報を提供するプラットホームとして、情報拠点作りには欠かせないシステムなのです。

電子ファイリングシステムのお勧め

当社がお勧めするファイリングシステムは、このようなニーズに応えるべきシステムとして開発されたシステムです。

システム拡張性に優れ、1台での単独利用から大規模ネットワークまで幅広く利用できます。

例えば、単独利用で導入した後、環境が整えば後からそのままネットワーク利用での大規模利用に移行できます。当然、単独利用で作成したデータも大規模利用に移行してもそのまま継承でき、情報に無駄がありません。

また、地図情報システムと連携して動作させることなどのカスタマイズ可能などの拡張性にも優れています。

もちろん、初心者から上級者まで使える操作性のよさと豊富な検索機能、見易さなど使いやすさにも定評があります。

ぜひ御導入を検討ください！！

ぜひ、情報化拠点作りの第一歩としてのファイリングシステムの御導入をされてみてはいかがでしょうか。

今まで光ファイリングといったマイクロフィルムの電子処理的なシステムは存在していましたし、それなりに有効な利用をされてきました。しかし、これは2値の世界であり今ひとつ応用が限定されていました。

最近は、2値に限らず写真、絵、動画、音声、およそコンピュータで扱えるデータをファイリングすることが可能となっていました。

データベースの利用

さて、大量のデータに恵まれたデータベースは昨今のインフラの進歩でいろいろな応用が考えられるようになっています。

特に、情報公開に対応した動き、ISOに対応した動き、CALISに対応した動き等、情報の整理を求められる動きが盛んになりつつあります。

また、コンピュータは、情報入手やコミュニケーション窓口としての利用の仕方が今後益々重要視されてきています。これも、データベースの存在が欠かせないことなのです。

ここで、データベースを利用した一例を示します。（添付資料1）

データベース構築を支える産業の勃興

デジタル化された情報の内、特にデジタルコンテンツと呼ばれる種類の情報は大量に持っているということがそれだけでセールスになります。デジタルコンテンツというとどうしてもコンピュータグラフィックデザインなど特殊技術を連想しがちですがこれはデジタルコンテンツの二次利用の話にすぎません。コンテンツなるものはどこにでも転がっているものですが今は集中していない、利用しやすい形になっていないだけなのです。重要なのはそのようなコンテンツをデータベース化することでそれだけで情報産業が発生します。

そして、アナログデータを即デジタル化できればその間に特殊な技術は存在しません。従って、主としたスキャニングによるデータ入力が一つの産業としてクローズアップされてきました。

おわりに

前記したとおり、データベースはデータが無くてはその性能を論じても始まりません。大量のデータが価値を生むのです。しかし、逆にそのように価値のあるデータは、効率よく整理でき安全に管理できる箱を用意する必要があります。しかし、蓄積されたデータの価値に比べれば安いものかもしれません。

まずは、どのような情報をどのように整理してデータベースを作ろうかと考える前に、思いつくままに情報のデジタル化を図ることがデータベース構築の近道ともいえます。その意味ではファイリングシステムによるデータベースの構築が有効です。

そして、価値のあるデータが存在すれば大変意義のある利用方法がアイデア一つで広がってくることでしょう。

地域情報データベースを利用した 高齢者を中心とした町民の知恵と出雲文化を子供たちへ

添付資料1

本ネットワークは、高齢者が持つ知恵や知識を子供たちに伝える場を、高情絵画像システムやファイリングシステムを利用したコンピュータネットワーク上で実現しようとする実験システムです。高齢者の行いを知恵として伝えることで、子供たちとの交流を行なうことをねらっています。また、このシステムを利用して、高齢者の行いには知識として企画も含め、子供たちの教育に参加してもらうこと、子供たちはコンピュータ教育の一環となることからも考えられます。本ネットワークの健になるのは、コンテンツ企画など情報収集の収集になります。これを実現するために、行政情報のデジタル化に合わせた情報収集が手早く有効です。その上で、町民の協力を求めるにあたっては、コンテンツ企画が可能となります。そのためにも、組合だつた企画団体の存在が必要となります。また、公的には文化委員会のような施設がリーディングを行うのが良いでしょう。そこで、各分野毎に「住民知恵フォーラム」のような住民参加の組織を作り、それを運営するがよいでしょう。これからこのコンピュータの利用は、ワープロなどの作業の道具としてではなくインターネットに代表されるような情報収集や伝達手段の窓口として、すなわち情報端末としての利用の仕方が求められます。

